

書 評

平岡昭利編：離島に吹くあたらしい風。海青社、2009年9月刊、111p., 1,667円（税別）

離島に吹く風は、戦後一貫して台風のような暴風雨であった。それも過疎化や少子高齢化といった国土縁辺地域に共通する逆風だけではなく、炭鉱閉山や造船所の閉鎖、さらには地場産業の衰退などの局地的な突風も吹いた。離島を襲う暴風雨を和らげるため、公共投資によるインフラ整備が進んだが、一時しのぎだったはずの公共投資に対して、離島は依存を深めてきた。さらに沖縄や瀬戸内海では、多くの近距離離島が本土と橋で結ばれたが、交通条件の改善は新たな人口流出を生んだ。

やることなすこと失敗だらけの離島政策に呻吟するうちに、離島の状況は待ったなしの所まで追い込まれてきた。このままでは多くの小規模離島で居住者がいなくなる「無人島化」が広がりつつある。本書の母胎となった2007年日本地理学会秋季学術大会シンポジウム『離島に吹く新しい風を捉える』は、このような危機感に基づいて開催された。このシンポジウムでは弱まることのない暴風の中にも、離島の今後を切りひらく新たな風を見いだすことを目的とした。評者はこのシンポジウムのオーガナイザーの1人であったが、予想を大きく上回る来場者数に目を疑った。そして来場者全員が同じ気持ちであったことだろう。離島という、地理学でもマイナーな研究分野にこれほど関心が集まったこと自体が、「あたらしい風」であったともいえよう。

本書は同シンポジウムの成果を一般向けにわかりやすく解説することを目的として出版された。したがって、表現や分析は学術書としてはきわめ

て平易である。しかしこれは編者らの研究水準が低いことを意味しているのではない。むしろ地道なフィールドワークに裏打ちされた、具体的で実現性の高い離島振興の提案が盛り込まれている。

本書は「あたらしい風」が吹く場所を人口動態から突き止めようとしている。すなわち、人口が維持されるか、あるいは増加している離島には、人口を支持する「風」が吹いているとする。このような離島の数は少ないものの、人口の流出に苦しむ離島のいわばモデルケースとなりうる。本書ではあたらしい風を、ツーリズムの風、新産業への挑戦の風、Iターンによる人口流入の風に分類している。本書の構成でみると、I～Vがツーリズム、VIが新産業、VIIがIターンについて論じている。以下に構成を示す。

I. インバウンド観光に揺れる国境の島－対馬（長崎県）－：助重雄久

II. キリシタン・ツーリズムが展開する島々－五島列島（長崎県）－：松井圭介

III. グリーン・ツーリズムの導入を模索する島－粟島（新潟県）－：山田浩久

IV. ブルー・ツーリズムの定着を図る島々－壱岐島・青島（長崎県）－：中村周作

V. エコツーリズムの展開と住民評価－西表島（沖縄県）－：宮内久光

VI. エミュー牧場を経営する漁業の島－蓋井島（山口県）－：平岡昭利

VII. Iターン者が急増する南国の島－石垣島（沖縄県）－：石川雄一

Iのインバウンド観光は、国境の島、対馬ならではのツーリズムである。ゲストは韓国からやってくる人びとである。韓国から見た対馬の観光資源は、自然景観に加えて朝鮮通信使遺跡をはじめ

とする歴史遺産にある。韓国南部から対馬は指呼の距離にあり、釜山発の1泊2日ツアーが数多く催行される。現在政府はインバウンド観光の振興に力を入れているが、対馬はその成功例と目されている。しかし、対馬のインバウンド観光は、団体観光客を主体とする典型的なマスツーリズムであるだけでなく、社会的慣習の相違に根ざすさまざまな文化的軋轢を引き起こしている点に問題がある。筆者の助重は、両国の狭間で戸惑う対馬の旅館・ホテルの実態をつぶさに描写する。インバウンド観光は国境に位置する離島における今後の重要な振興策の1つであるだけに、対馬は貴重な先行事例である。

Ⅱのキリシタンツーリズムは宗教地理学を専門とする松井の筆になる。ひっそりと息づいていた宗教文化が、外来者の目に触れたことにより観光資源化されるプロセスを鮮やかに描き出している。そこにあるものをゲストにただ紹介するだけでは、観光資源にならない。本章では教会を訪れる方法として「ウオーク&クルーズ」なるツアーが取り上げられ、観光資源を作り上げる鍵が、その見せ方にあることが示される。また、国内では少数派であるカトリック信者が、一種の「巡礼」として島内をめぐる行為を論じ、ゲストにとって特別な意味づけを場所に与えることが、観光地としての成立条件であることを述べている。

Ⅲ・Ⅳは島の自然環境を観光資源とした新たなツーリズムの模索を論じている。これらで取り上げる粟島・壱岐・青島は、いずれも漁業や自給的な農業を基盤とした離島であり、20世紀的なマスツーリズムからは完全に取り残された島である。これらの島で観光資源と目されたものは、住民たちの日常的な暮らしであった。粟島では郷土料理の「わっば煮」が、青島では磯遊びやタコ壺漁体験などのアトラクションが考案されている。しかし、グリーンツーリズムなどの体験型観光は、ホ

スト側の試行錯誤にもかかわらず、一定の収益を生む産業として定着していない。その一方で、筆者の山田・中村が共通して指摘するように、住民は「島のため」の観光が第一と考え、「観光のため」に島が犠牲になっては主客転倒であるという意識を抱いている。表現を変えると、住民は観光によって従来の生活がかき乱されることを懼れている。このようなツーリズムは、いわば副業的地位にとどまらざるを得ないであろう。

Vのテーマは、ダイビングとマングローブ観光を中心とするエコツーリズムに対する住民の評価である。対象地域の西表島は、脆弱な自然環境に負荷をかけない、本来の意味でのエコツーリズムの日本における先進地域である。筆者の宮内はエコツーリズムに関する大規模なアンケートを実施した。エコツーリズムは島の環境保全に貢献すると考える西表出身の観光従事者と、エコツーリズムそのものが環境を破壊しているとする県外出身者を両極に、この島では多様な評価がささやかれている。それは一見エコっぽいカヌーツアーが、その実態はモーターボートでマングローブをかき分けるマスツーリズムの性格を有するからでもある。エコツーリズムの先進地域であるこの島では、エコツーリズム自体が多様に分化している。結局問題となるのは、住民が誇りとする自然環境を商品としなければ生活できないという、ツーリズムが本来的に内包するジレンマである。

VIIの石垣島におけるIターンも、ツーリズムの延長線上に位置づけられよう。石垣島にIターン者が集中する理由は、美しい自然環境だけではなく、中心都市石垣の都市的集積、既存集落の紐帯から解放された開拓集落の存在、といった本土の都市居住者が入り込みやすい条件がそろっていたことにある。青い海、緑のサンゴ礁も好きだが、コンビニやパチンコ屋のある都市的利便性も手放したくないという、いささか贅沢な移住者たちが

石垣島に集中した。彼らの中には定住指向が強く、将来の島の担い手として期待が寄せられている人びとがいる一方、筆者の石川は明示的に記述することを避けているようであるが、根無し草のようにこの島に流れ着く本土大都市出身者が、地元紙に取り上げられるほど顕在化していることも事実である。

編者の平岡が取り上げた蓋井島の事例は、本書の中で唯一ツーリズム以外の産業に関する論考である。離島はそれぞれ独自の地域的条件を有しており、農業や漁業で自立している島も少なくはない。しかし多くの離島は、第一次産業の担い手が流出し、既存産業が基盤から崩壊しているのが実情である。エミュー飼育という新分野に挑戦するこの島の成否はともかくも、限界的状态にある離島では、既存の常識を覆した取り組みが必要であることを、この事例は示している。

これらの報告から、離島にはたしかにあたらしい風が吹いているように思える。しかしそれはあまりにはかなげなそよ風で、離島の生活基盤を根底から覆そうとする暴風に抗するにはあまりにかすかである。それでもこの風に乗れば、あるいは離島が目指すべき新たな方向が見えるかも知れない。

「あたらしい風」は観光・ツーリズム方面から吹いている。しかし離島のツーリズムは既存のマスツーリズムと一線を画すべきであることが読み取れる。離島には、年間何百万人ものゲストを受け入れる余地はないし、人口1万人にも満たない離島では、たとえ1,000人の入り込み客でも大きな経済効果が期待できる。すなわち、離島では身の丈にあった規模の観光開発が必要である。そのためには巨大な観光市場ではなく、むしろ差別化され、粒のそろった消費者層を対象とすることが有効である。日本人は観光のゲストとしてはきわめて目が肥えている。このようなゲストに対して

は、レディメイドではなくカスタムメイドの観光メニューをそろえる必要があるが、五島列島のキリシタン観光や西表島のエコツーリズムは、特定の属性に特化したゲストが望むとおりのアトラクションを提供している。さらにブルーツーリズム・グリーンツーリズムは、ホスト側のホスピタリティや、金銭を超えたあたたかな関係を求めるゲストの要求にも応えうる。ツーリズムが離島の生き残りにある程度の役割を果たすことが期待される。

それでも評者は、ツーリズムが離島振興の特効薬であるというつもりはさらさらしない。離島の維持のためには、医療・介護・教育などのやせ細った生活基盤の立て直しと、農業・漁業・地場産業などの産業基盤の再構築、交通をはじめとするインフラの整備が必要である。例えば奄美群島の伝統産業である大島紬を、観光資源としてショウアップすることに金をつぎ込むよりも、地域経済を支える基幹産業として地道に再建する方が大切である。この風が何でも観光、何でもツーリズムの風であるとしたら、評者は乗れない。

(須山 聡)

橋本雄一編：『地理空間情報の基本と活用』古今書院、2009年7月刊、174p., 3,200円(税別)

「地理空間情報活用推進基本法(以下、NSDI法)」が2007年5月に成立し、同年8月に施行された。さらに「地理空間情報活用推進基本計画(以下、基本計画)」が、翌年の2008年に策定された。これらの法整備や計画策定は、誰もがいつでもどこでも位置や場所の情報を入手・活用できる「地理空間情報高度活用社会」の幕開けを示唆するものであろう。

本書は、このように地理空間情報をめぐる環境

が大きく変化しているなかで刊行された。地理空間情報を取り巻く全体像をわかりやすく論じた「専門書」、NSDI法や地理情報標準の学習に用いる「教科書」、そして地理空間情報に関する理解を深めるための「参考書」、それぞれのニーズに応える書籍である（「はじめに」より）。全4部17章から構成されており、それぞれ知識・経験に富む研究者・実務家が執筆を担当している。以下、各部の概要を紹介していきたい。

第Ⅰ部「概念編」は、「地理空間情報活用推進基本法の成立（第1章）」、「地理空間情報活用推進基本法と基本計画（第2章）」、「GISの概念と歴史（第3章）」、「衛星測位の概念と歴史（第4章）」で構成されている。NSDI法・基本計画の概要や成立に至るまでの経緯などが解説されており、最近の法整備の状況について確認できよう。GISや衛星観測といったシステムの歴史や現状、将来への展望も提示されており、地理空間情報に関連する基礎的な概念を学ぶことができる内容となっている。さらに今後、地理空間情報をいかに整備・流通・利活用していけばよいか、という課題も提示されている。

第Ⅱ部「実務編」には、「地理空間情報の標準化（第5章）」、「地理空間データのメタデータと製品仕様書（第6章）」、「地理データ入力と検査法（第7章）」、「地理空間データモデルと空間分析（第8章）」が収録されている。まず、地理空間情報標準の現況や必要性が述べられ、その具体的な作成方法が図などを交えつつ説明されている。さらに、空間データモデルの概念や、基本的な空間分析手法の解説も行われている。したがって、地理空間情報の作成から分析に至るまでの知識を系統的に修得することが可能となろう。

第Ⅲ部「企業活用編」では、「測量・地図企業におけるGIS利用（第9章）」、「自治体における防災GISの構築（第10章）」、「自治体における統合

型GIS構築（第11章）」が提示されている。ここでは、NSDI法制定に伴い測量・地図業界のサービス内容が多方面へと展開しつつあることや、自治体が災害への公助やインフラ管理を目的としたGISを構築し、関連サービスの提供を行っていることが紹介されている。地理空間情報高度活用社会の形成に向けた、自治体・民間企業の動向が把握できるようになっている。

第Ⅳ部「研究活用編」では、「沖合海域における持続可能な漁業活動支援のためのユビキタスな情報サービスに関する研究開発（第12章）」、「北海道におけるGISを活用した自然環境情報の共有化と情報公開（第13章）」、「環境行政におけるGISの利活用（第14章）」、「LiDARによる3次元GISデータの自動生成技術（第15章）」、「生物生産のロボット化と情報化（第16章）」、「GISと衛星測位を用いた積雪寒冷地の道路交通管理システム開発（第17章）」が紹介されている。これら6つの事例からは、様々な分野において地理空間情報が活用されている現状を知ることができよう。

また、付属資料として「メタデータエディタ」および「製品仕様書エディタ」の利用方法が掲載されている。第Ⅱ部と合わせて精読することにより、地理空間情報標準に即したデータの作成が可能となっている。

一昔前までは、地理空間情報の利用は研究者や技術者に限られていたように思う。しかし現在は、意識せずとも皆が地理空間情報を利用している時代である。例えばインターネットを通じた住所検索や経路検索などは、もはや日常的に見られる光景となった。こうした時代において、研究者、技術者に限らず、地理空間情報に関心のある人全てに、本書を薦めたい。地理空間情報に関する「専門書」、「教科書」、「参考書」を兼ね備えており、自身の知識・技術に応じて読み進め、知見を広げることが可能である。そして、それぞれの分野・

地域における活用方法や発信の仕方を議論していくことで、「地理空間情報の輪」が様々な地域やスケールで展開していくことを願う。

(駒木伸比古)

神田孝治編：『観光の空間－視点とアプローチ』
ナカニシヤ出版，2009年10月発行，284p，2,900円（税別）

神田孝治編：『レジャーの空間－諸相とアプローチ』
ナカニシヤ出版，2009年10月刊行，270p，2,900円（税別）

姉妹本である両書には、地理学および社会学を中心として多様な学問分野の研究者が著者として参加している。この著者の多彩さから、編者のもつ幅広い「研究者ネットワーク」をうかがえる。『観光の空間－視点とアプローチ』は、これまでの観光関連の書籍において看過されていた「空間」の問題に焦点を当て、多様なアプローチを展開している。『レジャーの空間－諸相とアプローチ』も同様に、アプローチとしての「空間」をレジャーの諸相に対応させ、多彩な議論が展開されている。両書ともに、各章冒頭にわかりやすく表現された導入が、各章末尾に3段階の課題が設けられており、学生用テキストとしての使用が意識されている。以下、両書の内容を概観する。

まず、『観光の空間－視点とアプローチ』では、序章において、編者が「空間」という視点の整理、および各章の位置付け・解説を行っている。そして、観光について「空間」という視点から3部が編成され、各部に4つずつサブテーマが設けられ、さらにそれぞれのサブテーマに対して2つの章が配置されている。

Part 1「観光空間の形成と変容」については、まず「観光地の形成と交通機関の発達」をサブテ

マとして、交通機関の発達に加えて観光情報が観光地形成に重要な役割を果たしたことが示されている。1章（関戸明子）では草津温泉の変容と鉄道交通の整備との関係性、また2章（齋藤枝里子）では大阪商船の寄港地周辺の観光地化および瀬戸内遊覧の成立が論じられている。次の「観光地の創造」では、観光地の社会的な創造について論じている。3章（飯塚隆藤・加藤めぐみ）では、神戸市須磨寺遊園地が花見の場と化し、名所として成立する社会的な背景が探求され、4章（松井圭介）では長崎のキリシタン観光における行政とカトリック協会という二つの行為体の役割を考察している。また、「観光資源化と社会の変容」では、観光資源と社会的背景の関係性について論じている。5章（森 正人）では、イギリスのダラムの炭鉱産業が観光を通じて遺産として再評価され、そこから「地域」がイメージされた過程について、6章（妙木 忍）においては、客層の変化から秘宝館という性をテーマにした遊興空間の変容について考察している。最後に、「国際観光と地域」では、観光地化の地域インパクトについて検討されている。7章（横山 智）は、ラオスのヴァンヴィエンのバックパッカー地区形成による地域への社会経済的影響について論じ、8章（森本 泉）では、楽園イメージが投影されるネパールのカトマンドゥにおいて形成された観光業集中地区とそこでの住民向け消費文化の創出について述べられている。

Part 2「観光客の空間行動と情報・経験・イメージ」においては、はじめに「観光客の空間行動」が論じられている。9章（呉羽正昭・金 玉実）では日本における外国人観光客の特徴が、10章（佐藤大祐）では高度経済成長期の長崎県雲仙の外国人宿泊客の客層の変化が述べられている。次に観光行動との関係から「観光空間の情報」が検討されている。11章（金子直樹）では日本人の観光に影響を及ぼしたガイドブックの変遷について、12

章(岡本 健)ではインターネットを通じて創出されたアニメ聖地巡礼の特徴について考察している。さらに、「観光空間の経験」では紀行文の分析から観光の特徴を論じている。13章(滝波章弘)は多様な旅行雑誌の紀行文における観光の共通・相違点の要因を導出し、14章(橘 セツ)は19世紀後半の西欧人の日本旅行記から彼らの異なるスケールの風景の経験の仕方を考察している。そして、観光行動を生成する要因としての「観光空間のイメージ」について、15章(遠藤英樹)は観光地がメディアによるイメージに編まれることで形成されることを論じ、16章(森 正人)は、日本における「アジアリゾート」や「アジア雑貨」のイメージの生産・消費から観光の役割を考察している。

最後に、Part 3は「観光空間におけるコンフリクトと融和」に着目し、住民と観光客にとって異なる性質・機能を有する観光空間の在り方について議論している。まず、「遺産化と観光地化のコンフリクト」として世界遺産を取り上げ、17章(藤木庸介)が中国麗江市の観光開発に伴う地域の変容について、18章(才津祐美子)が白川郷の観光資源化のインパクトと文化遺産保護との関係性について検討している。次に、「ゲストとホストのイメージをめぐる対立」の問題について、沖縄を取り上げて議論している。19章(神田孝治)は戦前期における沖縄イメージの特徴およびこれに対する沖縄住民の反応について考察しており、20章(大城直樹)は、現代における沖縄の観光イメージに関する問題を様々な局面から検討している。さらに「自然をめぐるコンフリクトの諸相」を取り上げて、21章(フंक・カロリン)では、ブルーツーリズムの「空間」をめぐる様々な争いを論じ、22章(荒山正彦)は那覇市の国場川河口を取り上げ、マングローブと干潟という自然環境保全同士に生じた対立について議論している。最後に、「観

光と地域の融和」に焦点を当て、23章(堀野正人)は奈良町におけるまちづくりについて生活空間と観光空間の両者が融和・共存した様相とその要因を検討し、24章(松村嘉久)では「あいりん地区」の空間変容から、外国人個人旅行者の誘致の戦略および成果が論じられている。

次に、『レジャーの空間-諸相とアプローチ』は、まず序章において編者がレジャーの概念を整理し、レジャーの空間の特権について論じている。そして、『レジャー白書』に整理されているレジャーの諸相すなわちレジャーの部門分けから4つの部が構成され、それぞれの部に対して、「空間」についての3つのアプローチが設定され、アプローチごとに2つの章が設けられている。

まず、Part 1では、「スポーツの空間」について論じている。最初に「スポーツ空間の形成」に対するアプローチとして、1章(佐藤大祐)では、明治期以降の日本におけるヨットの伝播に重要な役割を果たした集団の特徴を、2章(井口 梓)では民宿経営の変遷から千葉県白子町におけるテニス民宿観光地の形成過程を検討している。次の「スポーツ空間の立地」では、3章(呉羽正昭)においてはスキー場立地の地域的特徴とその時代的変遷について、4章(坂井康広)では社会的背景の変遷からみた野球場の立地について述べられている。さらに、「スポーツ空間と文化」においては、5章(小長谷悠紀)では日本におけるサーフィンの文化史とメディアとしての空間の役割について、6章(神田孝治・杉本育美)では、社会的背景の変化からランニングとジェンダーの関係性の変容について議論している。

Part 2「趣味・創作の空間」においては、第1に、「趣味・創作空間の形成」として、7章(吉田道代)は「メイドカフェ」に焦点を当て「オタク」のレジャー空間としての秋葉原の特徴について、8章(山口 晋)は、ストリートをめぐる若者アーティ

ストの空間創造と都市の空間管理との関係について論じている。第2の「趣味・創作の空間と近代社会」の9章(長尾洋子)は、明治後期から大正期における越中おわら節を事例として、国や経済との関係の中から地域の芸能が生み出す空間について考察した研究である。また、10章(田保 顕)は、日中戦争中の戦場への芸人派遣実施の背景およびそれを見る・見せる経験について考察している。第3の「趣味・創作空間と地域」の関係については、11章(宮本結佳)で現代アートの空間の形成過程を様々な人々の相互関係に着目して検討し、12章(木村オリエ)では新たな社会関係を築く手段として男性退職者の地域サークル活動の参加を検討している。

Part 3「娯楽の空間」では、まず「娯楽空間の形成」が論じられている。13章(加藤政洋)は、近世から近代までの都市の娯楽としての「レンタル空間」の機能分化について論じた研究であり、14章(寄藤晶子)では公営ギャンブル場を中心に生成される社会空間について考察している。また、「娯楽空間のイメージ」について、15章(神田孝治)では、日本統治期の台湾の花街や遊郭の立地とイメージとの関係性が権力関係から検討され、16章(阿部亮吾)は「フィリピン」の神話や「フィリピン人女性」のイメージが埋め込まれた「フィリピン・パブ空間」の分析から、日本社会における東南アジア系女性に対するまなざし・欲望を考察している。そして、「娯楽の空間の管理」として、17章(青木隆浩)は明治期から大正期にかけて盛り場が多機能化によって混乱し、その解決のために青少年が排除される過程を論じ、18章(杉山和明)は、「出会い系メディア」の創出する空間への自主的/社会的な規制の相互媒介的な過程について検討している。

最後に、Part 4では「観光・行楽の空間」が取り上げられている。そこでは、まず「観光・行楽

空間の形成」として、19章(砂本文彦)では1930年代の国際観光政策による国際リゾート整備および日本における国際観光ルート設定について論じられ、20章(奥野一生)では日本におけるテーマパークの立地条件とその展開過程が検討されている。次に、「観光・行楽空間の変容」については、21章(須藤 廣)は日本人のハワイ旅行イメージと観光地が発信する観光空間のイメージの関係性をその変容から検討し、22章(内田忠賢)は日本の代表的なレジャーランドの社会的意味・背景を考察している。さらに、「観光・行楽空間におけるゲストとホスト」の関係性が論じられている。23章(荒山正彦)では、「旅行の記録」の分析を通して、戦前期における日本や日本人の植民地観光の空間について考察し、24章(上江洲 薫)では沖縄県の有料海水浴場の形成および隣接地域の開発過程が述べられている。

以上のように両書では、「空間」を中心に据えた多種多様なアプローチが、各章ごとに展開されている。多彩な内容であるために、見方を変えて時間的な視点を加えれば、本書は観光とレジャーの変容およびそれをめぐる当時の社会的背景を知ることが可能である。翻って、観光・レジャー研究における一貫した視点としての「空間」的アプローチの有用性を再確認することができた。この意味で、まとめとして終章が設けられ、観光・レジャーの「空間」に着目した成果として、新たな知見、課題および展望が提示されると、評者としてはありがたかった。しかし、両書ともに「空間」を焦点として多彩なアプローチを編みあげるといふ編者のねらいが十分に達成されている。本書は、観光地理学および観光社会学の分野にとどまらず、すべての観光学徒にとって、多様なアプローチを学ぶことができる格好の著書といえる。

(小島大輔)